

# 徳島のうた

## —民謡と民俗芸能・伝統音楽の保存の試み—

小田原令幸, 川内由子

### はじめに

「徳島のうた」生まれかわりプロジェクトは、徳島にまつわる歌や民謡を保存するとともにその魅力を発信することを目的として発足し、これまでさまざまな活動を行ってきた。本稿では、①徳島県三好市祖谷地方の民謡の録音および発信、②《祖谷甚句》の現代的な音楽手法によるアレンジおよび楽曲公開、③「津田の盆（ばに）踊り唄」（《津田よしこの》とも呼ばれているが、本稿では「津田の盆踊り唄」と表す）と《ぞめき囃子》の録音を取り上げ、民謡と民俗芸能・伝統音楽の保存について考察することを目的とする。

### I. 祖谷地方の民謡の録音および発信

#### 1. 祖谷地方の民謡

徳島県三好市は、徳島県の西部に位置し、市の90%近くが山地によって構成され中央部を吉野川が横切っており、北は香川県、西は愛媛県、南は高知県に接し、剣山山系を南側にもっている<sup>1)</sup>。三好市の秘境と呼ばれる祖谷地方は西祖谷地区と東祖谷地区に分かれている。2014年3月の人口は西祖谷地区1,255人、東祖谷地区1,562人、2022年12月の人口は西祖谷地区518人、東祖谷地区652人<sup>2)</sup>と、人口の減少とともに過疎化が進んでいる地域である。

『徳島県の民謡』（徳島県教育委員会編 1989）には、祖谷地方の民謡が60曲掲載されているが、現在は歌われていない民謡も多い。本プロジェクトでは《祖谷の粉ひき節》（《祖谷の粉ひき歌》とも呼ばれているが、本稿では《祖谷の粉ひき節》と表す）と《祖谷甚句》の録音を実施した。祖谷地方の仕事歌である《祖谷の粉ひき節》は、旋律と歌詞が西祖谷地区と東祖谷地区では異なり、西祖谷地区の《粉ひき節》が有名である。七七七五の詩型をもつ《祖谷甚句》は、座興歌のひとつであり、歌詞には「祖谷

の甚句とかずらの橋は」と祖谷の風景が組み込まれている。

### 2. 《祖谷の粉ひき節》と《祖谷甚句》の録音およびYouTubeでの発信

#### 1) 録音状況

2019年3月12日（火）徳島県指定有形文化財（建造物）阿佐家住宅（写真1）で、《祖谷の粉ひき節（西祖谷）》、《祖谷の粉ひき節（東祖谷）》、《祖谷甚句》の録音を行った。（写真2、3）唄い手は、三好市東祖谷地区で祖谷そば打ち体験もできる料理店を営み民謡の伝承者である都築麗子氏に、レコーディング・ミックス等のエンジニアリングは本学短期大学部音楽科非常勤講師・SHOGIN ENGINEERING代表の原勇樹氏に依頼した。都築氏は祖谷地方の伝統衣装を身にまとい、阿佐家住宅の環境と相まって非日常感豊かで美しい録音現場であった。三味線は都築氏と関係が深い地元有志の演奏家が担当した。

この取り組みは、民謡が生まれた地域に赴き高いクオリティで民謡を録音し広く発信することを目的としている。かつてはやむを得ず簡易的な録音機材で録音していた現地での民謡録音も、今はデジタル技術が発達したことで、吸音や防音の環境さえ整えばレコーディングスタジオとさほど遜



1. 「阿佐家住宅」2019.3 小田原撮影



2. 「東祖谷での録音の様様 1」 2019. 3 小田原撮影



3. 「東祖谷での録音の様様 2」 2019. 3 小田原撮影  
色ない環境で行うことが可能になっている。住み慣れた地域で唄い手はリラックスした状態で歌うことができ、リアルな民謡を記録することができる。

## 2) YouTubeでの発信

録音した《祖谷の粉ひき節（西祖谷）》<sup>3)</sup>、《祖谷の粉ひき節（東祖谷）》<sup>4)</sup>、《祖谷甚句》<sup>5)</sup>の3曲を、歌詞情報と現地の雄大な自然風景写真のライドショーと合わせた動画としてまとめ、2021年1月に「四国大学学際融合研究所 新あわ学部門YouTubeチャンネル」にて公開した。

## II. 民謡の現代的な音楽制作手法によるアレンジおよび楽曲の公開

### 1. 《祖谷甚句》のアレンジ

民謡の魅力的なメロディを活かしつつ現代的な楽曲にアレンジすることで、徳島の民謡はもちろん、様々な音楽ジャンルの魅力を発信することを目指した。筆者（小田原）はエレキベースとDTMを専門としているが、他のアーティストの制作において編

曲やミックス、ギターや鍵盤楽器の演奏で協力するなど、専門にとらわれない活動を行っており、それを活かしたアレンジを試みた。

《祖谷甚句》は、親しみやすい詞とメロディを持つ可愛らしい曲であったので、それからかけ離れた意外性のあるアレンジにするために、変拍子、ジャズ、ラテンの要素を組み込んだ。曲の出だしから唄の序盤は7/8拍子でエレキベースのリフ<sup>6)</sup>が繰り返される。これはかずら橋の材料となるシラクチカズラが力強く、規則正しく組まれている様子の表現に挑戦している。また、ベースのリフで使われている音階と鍵盤ハーモニカのメロディで使われている音階が異なっており、複数のキー（調）が同時並行で鳴っていることで不気味さの演出を試みている。唄の中間から終盤は2拍子のトゥンバオ<sup>7)</sup>的な伴奏に変わり、キーも比較的是っきりしたかたちで展開する。曲の終盤はベースとピアノがリフを繰り返すなかでドラム・ソロが続く。ドラムは基本的に生ドラムに近い音色を使っているが、一部の音色に打ち込み感のあるものを使ったり、ループ素材を重ねたりしてテクノやドラムンベースの要素も加えている。

### 2. 《祖谷甚句》アレンジバージョンの公開

2021年1月に楽曲《祖谷甚句2021（徳島県民謡アレンジ）》<sup>8)</sup>と映像が完成し、「四国大学学際融合研究所 新あわ学部門YouTubeチャンネル」にて公開した。ドラムの打ち込み、鍵盤ハーモニカ・ピアノ・エレキベースの演奏、動画の撮影と編集、全てを筆者（小田原）が担当した。

## III. 「津田の盆踊り唄」と《ぞめき囃子》の録音

### 1. 「津田の盆踊り」の音楽

「津田の盆踊り」は、2002年に徳島県指定無形民俗文化財に指定された徳島県の民俗芸能で、自由奔放な踊りとともに、絶え間なく唄が歌われることが特徴的である。

「津田の盆踊り唄」の詩型は「七七七五型」で、「歌詞の内容から、津田の風土を歌ったもの、踊りを鼓舞するもの、浄瑠璃から題材をとったもの、嫁姑・親子などの家族関係を歌ったもの、夫婦・男女関係

の心情を歌ったものなど」(小林 2014:10)に分類される。

「津田の盆踊り」の鳴り物は、笛、三味線、鉦、四つ竹、小鼓、締太鼓、大太鼓で構成されており、「津田の盆踊り唄」に合わせて《ぞめき囃子》を奏でる。

東京2020オリンピック競技大会開会式において「津田の盆踊り唄」が起用されるなど、全世界的な注目が集まっていることや、唄や歌詞の民俗的価値も重要であることなどから、本取り組みにおいて音源録音とCD化、また楽曲を発信する運びとなった。

## 2. 録音状況

2022年9月25日(日)四国大学芸術館にて「津田の盆踊り唄」と《ぞめき囃子》の録音を行った。(写真4, 5) CDは、2022年12月に完成しており、(写真6, 7) YouTubeでの発信も予定している。

演奏者として、「津田の盆踊り保存会」より、「津田の盆踊り唄」の録音に8名が、《ぞめき囃子》の録音に10名が参加(メンバーの重複有り)し、唄はオリンピック開会式で流れた「津田の盆踊り唄」の音源でも唄い手を務めた山田貞子氏が担当した。レコーディング・ミックス等のエンジニアリングは、東祖谷での録音の時と同じくSHOGIN ENGINEERING代表の原勇樹氏が担当した。

2002年に「津田の盆踊り保存会」が発行したCD「津田の盆唄 踊唄」の歌詞カードには、46首の唄が記載されているが、今回は54首の唄と13首の囃子言葉を録音することができた。全てを演奏すると30分以上はかかる膨大な歌詞をもつ「津田の盆踊り唄」を全て発信することで、文化的資料として保存すること、徳島の文化の魅力を世界に発信していくことを目指す。

## 3. 録音機器

録音される音の質感は使用するマイクとヘッドアンプに大きく左右される。今回使用されたものの一部を羅列すると、ヘッドアンプではCALREC DUAL PRE, Solid State Logic Alpha VHD PRE, マイクではTELEFUNKEN TF47, sE Electronics VR1, JZ Microphones V11, AKG D320-Bなど、ヴィンテージ感や音の太さ、歪(ひず)み感や倍音の付加などを重視した機器が多い。これらの機器ラインナップは



4. 「津田の盆踊りの録音の様様1」2022.9 小田原撮影



5. 「津田の盆踊りの録音の様様2」2022.9 小田原撮影



6. 「津田の盆踊りCDジャケット」2022.12 ヤボデザイン 崔晶美 作成



7. 「津田の盆踊りCD盤面」2022.12 ヤボデザイン 崔晶美 作成

積極的に音色への味付けを行う選択と考えられる。レコーディング・ミックス等のエンジニアリングを担当した原氏は過去に久保田麻琴氏プロデュースの「ぞめき」シリーズのレコーディングのサポートをしたことがあり、その経験が民謡や伝統音楽の録音での音作りのスタンスに影響しているようで、「取って今っぽいクリアな音にはしない方法を取った」<sup>9)</sup>とのことである。完成した音源の質感は民謡の素朴さや空気感、あたたかさが感じられる仕上がりになっていたため、原氏の選択が功を奏したと考えられる。

#### IV. 民謡録音の現状と今後の課題

##### 1. ポップスなどの録音と民謡録音の相違点

レコーディングエンジニアの多くの仕事は商業作品の録音であるが、今回のような研究や記録の目的での民謡録音は、商業作品の録音とどのような面が異なるのかについて原氏は次のように述べている。

演奏を生業としたミュージシャンが録音する場合、多くはレコーディングそのものに慣れていたり、レコーディングの手順や流れを把握している演奏者が多く、リテイクや部分的差し替えなどについて、双方から柔軟に提案し合ったりしながら作業を進めることができる。しかし、今回のような民謡の録音では、演奏には熟練していても録音の現場には不慣れな方が多く、また年配者が多いため、演奏者とのコミュニケーションや手順も違ったかたちにする必要があり。具体的には、できるだけワンテイクで済むように、また気持ちよく演奏してもらうことを最優先する。そのためには音量がレベルオーバーしないような入念なレベル合わせ、そしてエンジニア側の求める手順や都合について説明しすぎず、演奏に集中してもらえるような環境や雰囲気を作ることが重要である<sup>10)</sup>。

実際に、楽器によってはマイクとの距離が安定しないなど、一般的な音楽録音においては望ましくない状況も生まれてしまっていたとのことであった

が、それよりも演奏者の勢いやノリを重視し敢えて細かい注意や指示はしないという判断で録音を続行したというシチュエーションもあったようである。レコーディングエンジニアは技術職でありながら、場の人々の雰囲気や熱気に寄り添い、かつ状況によって柔軟に最善と思われる方法を選択していくような、判断能力とコミュニケーション能力が重要な職業である。

##### 2. 研究目的での音声の記録方法の今後の展開

先述のとおり、かつては高品質な録音をするためにはレコーディングスタジオなどに演奏者が赴くしか方法がなかったが、現在は吸音や防音の環境さえ整えば本格的なレコーディングスタジオと遜色ない環境で行うことができ、場所に縛られないかたちでのレコーディングが可能になっている。そういったこれまでの手法や環境の変化をふまえて、今後の民謡録音のような研究目的での録音がどのように変化していくかについて原氏は次のように述べている。

かつてのフィールドワークにおいて民謡を録音する場合は、テープレコーダーのような簡易的な機材で録音するしか手立てがなかった。しかし今の時代になって振り返ると、アナログテープの音質は一概に悪い音ではなかったのではないかという評価になってきている。これは音楽制作ソフトなどでアナログテープの音の暖かさや歪（ひず）みをシミュレートするソフトウェアがいくつも出ていることからわかる。現在はというと、簡易的な録音はすべてスマートフォン一台でまかなえてしまう。スマートフォンのみで録音した場合の品質の評価について、時代が進んだのちに再評価されることがあるか、というと、それは有り得ないと感じる<sup>11)</sup>。

スマートフォンのみによる録音やハイファイすぎる録音方法は、表現そのものを阻害することになりかねない。スマートフォン付属のマイクが音楽ではなく人間の話し声を集音することに特化していることや、音声データが圧縮されてしまうこともその理由である。また、人間の耳が、「ノイズが少なけれ

ば良い音」「原音に忠実であれば良い音」とは必ずしも判断しないという難しさがある。特に音楽は情報であると同時に表現でもあるので、その表現に合わない音質での録音は、どれだけ音質面でクオリティが高かったとしても良い表現とはいえなくなってしまう。今回の取り組みの目的のひとつは「魅力を発信する」ことであるため、表現が損なわれないような方法を目指したことは目的に合致していたといえる。しかし、表現としてではなく、あくまで記録としての録音であれば、そういった面に配慮する必要がないとも考えられる。

かつては持ち運ぶことが叶わなかった巨大なレコーディングスタジオの機材たちと品質が変わらないものをコンパクトに持ち運べてしまう時代になってしまったことには変わりなく、アナログ機器のみを使う時代に逆行することも有り得ない。目的や予算、シチュエーションや時代に合った手法を今後も模索し続けていく必要がある。

## V. まとめ

民謡は、本来は後世に受け継がれていくものである、しかし、唄い手や担い手の減少、過疎化、高齢化など社会の急激な変化によって、多くの民謡は衰滅し、伝承されている民謡も歌詞や旋律が変化するなど、そのカタチを変えていることが多い。

「徳島のうた」生まれかわりプロジェクトでは、徳島県にまつわる歌や民謡の録音、YouTubeでの発信、現代的な音楽制作手法によるアレンジに取り組んでいる。先に述べたように、民謡はその伝承過程で容易に変化すること、伝承活動を行う唄い手や担い手の人数減少から、その伝承と保存には工夫が必要である。たとえば、沖縄奄美民謡は電子化され、民謡伝承に貢献しうると指摘されており（金城2015:199-202）録音として唄を残すことは、民謡の保存、および口伝以外の伝承方法のひとつとして有効であると考えられる。

また、YouTubeでの発信や現代的な音楽制作手法によるアレンジでの楽曲の公開などにより、良いかたちでの文化伝承や民謡への親しみが、さまざまな年代・地域・国籍の方々にも生まれることが期待でき

る。今後も、徳島県にまつわる歌や民謡と民俗芸能・伝統音楽の保存および発信、伝承に寄与する研究を継続し、さらには新しい価値を発見し得る民謡のアレンジでの楽曲発表を試みたい。

## 謝辞

ご協力いただいた都築麗子氏と三味線奏者の方、「津田の盆踊り保存会」の皆様、エンジニアの原勇樹氏、急な要請にご対応・ご協力いただいた阿佐家住宅の阿佐氏と三好市の関係各位に深謝の意を表します。

祖谷地方の民謡の録音および楽曲公開に係る取り組みは、平成30年度四国大学新あわ学研究所の助成金の支援により遂行することができました。この場をかりて御礼申し上げます。

「津田の盆踊り唄」と《ぞめき囃子》の録音に係る取り組みは、令和4年度四国大学学際融合研究所の助成金の支援により遂行することができました。この場をかりて御礼申し上げます。

## 註

- 1) 三好市ホームページ  
(<https://www.miyoshi.i-tokushima.jp/>)  
2023年1月2日閲覧
- 2) 三好市ホームページ  
(<https://www.miyoshi.i-tokushima.jp/>)  
2023年1月2日閲覧
- 3) 《祖谷の粉ひき節（西祖谷）》  
<https://www.youtube.com/watch?v=PdccZvYjrw> 
- 4) 《祖谷の粉ひき節（東祖谷）》  
[https://www.youtube.com/watch?v=81WAW-x\\_9ts](https://www.youtube.com/watch?v=81WAW-x_9ts) 
- 5) 《祖谷甚句》  
[https://www.youtube.com/watch?v=G4d5A\\_YA2JQ](https://www.youtube.com/watch?v=G4d5A_YA2JQ) 
- 6) 繰り返される印象的な短いフレーズ
- 7) サルサなどのジャンルで用いられるリズムや伴奏の形態
- 8) 《祖谷甚句2021(徳島県民謡アレンジ)》

<https://www.youtube.com/watch?v=0fOTzbrcxIA>



- 9) 2022年12月13日ZOOMミーティングのかたちで実施
- 10) 2022年12月13日ZOOMミーティングのかたちで実施
- 11) 2022年12月13日ZOOMミーティングのかたちで実施

#### 引用・参考文献

岩井正浩・川内由子, 2020. 阿波踊りの周辺②-津

田の盆(ぼに)踊りの音楽・踊り. 民俗音楽研究第45号.

金城厚, 2015. 民謡研究と伝承のための録音資料アーカイブの展望. 人文科学とコンピュータシンポジウム.

川内由子, 2022. コロナ禍における「津田の盆踊り」の現状. 徳島地域文化研究第20号.

小林敦子, 2014. 「津田の盆踊り」の唄—「阿波踊り」の唄との比較分析—. スポーツ人類学研究 第16号. 徳島県教育委員会編, 1989. 徳島県の民謡. 財団法人徳島県文化協会.